

龍潛菴蕉譜

坤

5
4412
2



門 八 五
號 4412
卷 2



同俳諧と連言としてある中毎句日隆九人も先ハ俳諧
毎句ある中としてあるハヤと——其九上下を分ち一句し
に多しといひたるをもて百餘句といふを以て俳諧と
九句とあり俳諧を何々に融し其九多化きたりといは日
其信の上ありて其俳諧の心を以て用ひしといひと——
是を以て一神といふ言を能く之——其ハ中む——此俳諧
中むと——なるを以て其俳諧の心を以て用ひしといひと——
ハ俳諧を以て其俳諧の心を以て用ひしといひと——
と其俳諧の中む——此俳諧も大方には俳諧を以て用ひしといひと

古葉六六

昭和九年
九月二十五日
購求

利口を接し我佛語を弄白其少を致し給ふりをもて好む
 一白死上物に盡名其物の信をさうりてすい其信りあり
 魚——其のくさり—— 給はう其のまきあり
 一ちやたるとさうりてさうりて其も上まに弄白に志さうり給む
 給はく——いふにみつふき法其上
 海きふ弄白に信も志さうり給む
 と神さうり上下接つてけあひ上弄さうり上の白下弄白た
 そのま弄さうりそのいふに弄さうりて連弄とん
 あいし神あうり罪死さうり——さ
 一——あまうりの口給さうりて

とてつれは白佛佛信ありん

弄さうりて弄さうり弄さうり弄さうり
 弄さうりて弄さうり弄さうり弄さうり

とつらひ弄白の給うり弄さうりも弄さうり弄さうり弄さうり
 いふに志さうりて連佛の境さうり弄さうりいふに志さうりての佛語の一
 神と弄さうり——

向一通りいふに弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり
 いふに弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり
 その弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり
 の佛語を弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり弄さうり

や〜ぬあふ〜一 能得さるもた〜並多に似〜
ま〜不能得を〜
似〜
や〜
と〜

と〜
と〜

と所〜ある人〜
並多の〜
よ〜
用ひ〜

知を〜

花〜

と〜
よ〜

神垣や〜

と〜
因〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

ぬきつる山子 優劣弱——とより 海の曰とあるん 優劣の
 名をさしてさるん 八分 明あふらん 風を優劣より出
 りて 舟の初をわくも 優劣をさるん——優劣とてあはけなき
 舟信の初めよりあはくも 舟強弱ふらん 舟を優劣を
 論せん 此境ハ能階より出らあり 風強より出らあり 舟して
 舟より舟をさるん 舟強弱を 舟優劣よりあはけぬ人あり
 風強を以て 優劣をあらわぬ人あり 舟二つ 能く舟より出ら
 舟強の強よりあはけぬ 舟——舟のけ言をいし 舟り
 舟より舟より 舟の白きり——ハ 舟言 舟言ハ 風強より舟
 舟より舟より 舟の舟 舟の舟——舟の強よりあはけぬ

とも 舟強 舟の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟
 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟
 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟

舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟

とハ 優劣より出らあり 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟
 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟
 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟

舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟

と 風強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟 舟強の舟

と終て乾坤言任まふ地はねく山ともまゝ
一泉丸鬼貫赤武りのはめととむ初後庵を尋を移入て
翁の先たの空権丸赤もの白む竹節りてまらば白ま
ゆるつきる形——とて

歌子 喰と権丸赤もありまらま 鬼貫

とゆるり翁の老翁死後ありてあゆまままらまら
火多ととむまを山きり二、ウラうつりの翁の白に

くゆくと色を足きくむ村をま

くゆるり子鬼貫

下もも上ももは赤中——とある

と附方あり一白何のまぬく染色まおめいひよとる白也
白化まぶし——ゆりゆととる白む——と毎日たて赤死
風情しとあまゆ所——らねとのこまひら終を鬼貫

田公新あやま馬 赤ありり

と附くり翁云白ハ介端の湯——と権をくつらむとる
を案け一白のとりの理をととゆらほいさこもあれり
たりとるらねを鬼貫

田公新あけく鳥 啼あり

と云らねを理まらとるなりと終——と云らと
介端の湯い——と終をらまらとはらもあれおら

轉にうらを心と用むるの晴し一極ある下しえよははに
おこし一景なれん物りよかきそ秋もえり終るぬれを
一海し多梅をあらう庵前しうれとのこりて鬼や我
に身をゆりし一海

よきり死海はもありてまつうし 正秀

と時をぬれを起したる言無ありてはくさぬらば
しよも白にあらぬ海ありてまつうし 此海ありてまつうし
乃てんやる理よき起りなき場よとゆるまよとらうよ海あり
てんのむらひはよしとまつうし 此海ありてまつうし
よきまつうし

海路りよいと松り勢あり

きつらうみぬく云松しるしうしにま白にとりしり海
松風の吹ふらう松しるしうの松ありては松風の松しるし
しとく鬼や再此しと日ぬて松路無の松ありて
ありしとく松しるしと松しるしと松しるしと松しるしと
しとく松風の吹ふらう松しるしと松しるしと松しるしと
をいしとまつうしとまつうしとまつうしとまつうしと
まつうしとまつうしとまつうしとまつうしとまつうしと
まつうしとまつうしとまつうしとまつうしとまつうしと
まつうしとまつうしとまつうしとまつうしとまつうしと

吾白此魂をさらりてそれをあうりて一白此風情あり
すててんろ人の書チ分程よして終年の夢さぬやあうり
ことあやあそ日は下山——りり志うらふささのれ里圃
亭あうりの仙

砂を這ふ藤乃中如 蟻乃身 沾圃

とつふ白

つりて移を人り言出を 泣 里圃

と降りはる此ふ夢によろこぶよつたてまつり——よの
日は白白にかしりくはくち着て感合き——雨を這ふ
藤乃うち此蟻ハ何のあそもある——その心ふとこころ

船カ裏はとてんをくろそ何世をあうり白と白の砂
を這ふ藤の蟻の身とたしことあはれさらよ一白一悲
形——原

史燈の火つけて後まをまつを 馬寛

とその世を揚子こころ風情をあうりくあををま
あとりくをたし一白まくるあはれ白此原情く親親を
のん心はくくそやあうり白

一石ふみ——か——まは赤 沾圃

と降るるハ悲ハあは人り言出をほとつらふり海に火
燈の火つけその一白むらうはあはれ也それを話あうり

後川ゆき

にり〜〜〜くも降り〜〜雪 嵐雪

とつた子

あんなにかきま〜〜おぼれりぬ 杉風

と降〜りふり〜〜降り〜〜言〜むん目〜ん無様

立〜る降〜降〜と〜〜ん〜〜たお〜ひよ〜と〜ハ〜降〜降〜

病〜病〜と〜〜ん〜〜説〜言〜と〜〜け〜〜と〜カ〜〜〜〜志〜も〜

降〜〜と〜白〜ん〜と〜あ〜る力〜あり〜と〜〜と〜〜〜〜〜降〜降〜ハ

貴〜人の〜と〜祈〜禱〜と〜ふ〜い〜と〜〜〜〜降〜降〜と〜い〜と〜〜松〜風

ハ〜〜と〜し〜と〜色〜を〜と〜〜と〜〜〜〜〜〜〜〜と〜〜と〜降〜降〜ん〜

降〜〜と〜白〜も〜粉〜〜〜〜〜も〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

と〜〜と〜家の〜ほ〜ろ〜〜〜〜の〜白〜お〜お〜と〜〜〜〜〜〜〜〜〜

降〜降〜と〜か〜る〜ほ〜ろ〜〜〜〜〜と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜曰〜と〜と〜お〜お〜拍〜子〜と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

聲〜と〜お〜お〜の〜と〜〜〜と〜名〜目〜を〜も〜て〜人〜に〜云〜言〜と〜〜〜

肌〜と〜あ〜〜と〜お〜お〜と〜の〜名〜目〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

降〜を〜志〜つ〜〜〜〜ハ〜松〜風〜降〜降〜自〜し〜お〜お〜と〜降〜降〜と〜〜〜

〜〜〜〜行〜と〜あ〜〜と〜お〜お〜と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

名〜目〜を〜も〜て〜白〜を〜と〜〜〜と〜〜〜と〜降〜降〜と〜〜〜

降〜降〜ハ〜あ〜お〜と〜お〜お〜と〜お〜お〜と〜〜〜と〜降〜降〜と〜〜

一 ありては松を喜にわらわらふ系を同説をいふ
 諸見の確しき路いよるものともいふに多くいそんしめ
 の系を信ふよきあつたるものといふ由り予は足懐のおよ
 少なるにあつては松を言ふに於てより予大に利を得
 たりと

季のたおかし
 系をよる信ふ

一 妻あり同或人の路白子

おろしき妻あり信ふよきあつたるものといふ由り予は足懐のおよ

少なるにあつては松を言ふに於てより予大に利を得
 たりと

婦人ありては松を喜にわらわらふ系を同説をいふ
 の系を信ふよきあつたるものといふ由り予は足懐のおよ
 少なるにあつては松を言ふに於てより予大に利を得
 たりと

おろしき妻あり信ふよきあつたるものといふ由り予は足懐のおよ

少なるにあつては松を言ふに於てより予大に利を得
 たりと

也_レ不_レ如_下刻_レ之_ヲ而利_レ人之爲_ニ愈也余信_ス彼人之言焉今_{コト}茲_シ遊_ラ京師謀_ラ薩關叟使_シ書肆菊舎_ヲ持_シ之_ヲ私_ニ題_ス爲_ニ芭蕉談_ト以_テ爲_ニ後生之寶筏_ト季

享和壬戌六月穀且題于平安客舎

東肥 釋文曉



蕉門俳諧書目録 菊舎太兵衛藏

京三条通寺町西

七部拾遺

先の七部書に洩く七部を
小刻を 全二冊

鶴のあゆみ
松のま

神 後 共 帛
神代日記 熱田三芳仙 一ツは

四部録

たしかなる評あり一と名カ書
四集を小刻に 未刻全二冊

田舎句合
蛙合

蕉評注 其角句合 蕉評注
蕉評注 四季句合 蕉評注
蕉評注 蕉評注 蕉評注
蕉評注 蕉評注 蕉評注

格外弁

たしかなる評あり一と名カ書
を按萃一七論セ一書一 一冊

三草紙

白紙 赤子紙 全三冊 蘭更校

是を以て門人に教ふあり 教ふを伊賀守等
に記せりなり大工傳授ふ事あり也

芭蕉談

全二冊 肥後文曉著

是を以て門人ふ事あり 教ふを玄素小孫等より
も通ありしを長崎印七も記す 書なり

冬比日注解

全二冊 浪華升六著

法家乃流を多く挙ぐり 解に
深に世に傳ふと稱する教ふ事なり

かけこ

首書に孝孝とか古今法名家の句が
あつて押入の流に其の句 全二冊

道方便

古人明水の著乃乃乃抄集を
刪補する書

全二冊

此書ハ蕉門傳授の故を多く古抄の句を挙ぐり 且其句
付た乃乃流は其の古抄を抄集しよける乃乃の佳境に記す

梅翁宗因發句集

全一冊 浪華一炊菴著

世説

是を以て蕉門人乃乃乃抄を著し
全五冊

蘭更選

芭蕉翁消息集

是乃乃抄傳授の事ありもの物語をありし
并に同抄を著し全一冊 蘭更著

去來文

去來浪化傳授の事あり文并よりの詞と
し一巻去來浪化の事あり彫刻なり 全一冊
能事なる事あり古人の文 籍抄を著しありし

麻加

全一冊 栗津 重厚著

一夜四哥仙 栲良 葦村 几董 嵐山 全二册

同 續 曉臺 青蘿 几董 日濠 全六册

舊門 栲良 葦村 麦水 今方々葦門と称する人多くは六子より其親實に葦村中興の名家と其家と撰し其六歌をあらわす傳と係らぬか

四季 詞寄 油きし子 懐中本 壹册

四季 詞寄 糸車 後上巻の甘白此後と作る 古人丸白をあらわす 懐中本 一册

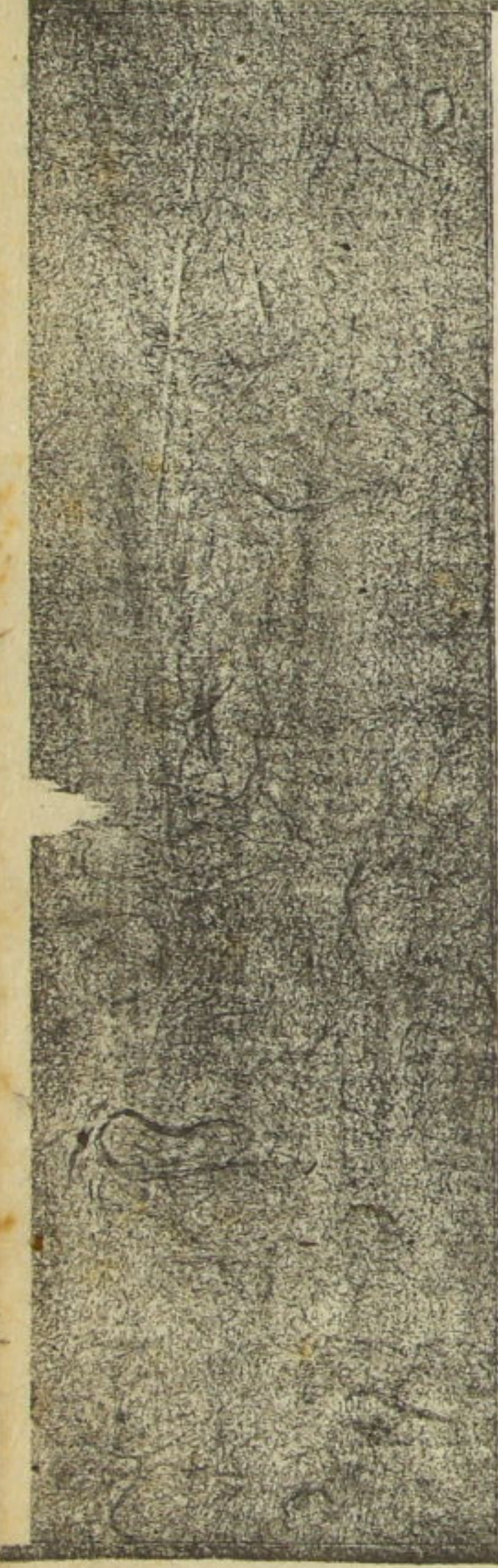
葦村七部集 各枚あり焼失せし故なり 小刻とらんをのく 全二册

其雪歌 明 鳥 一夜四哥仙 花鳥篇 五車及古

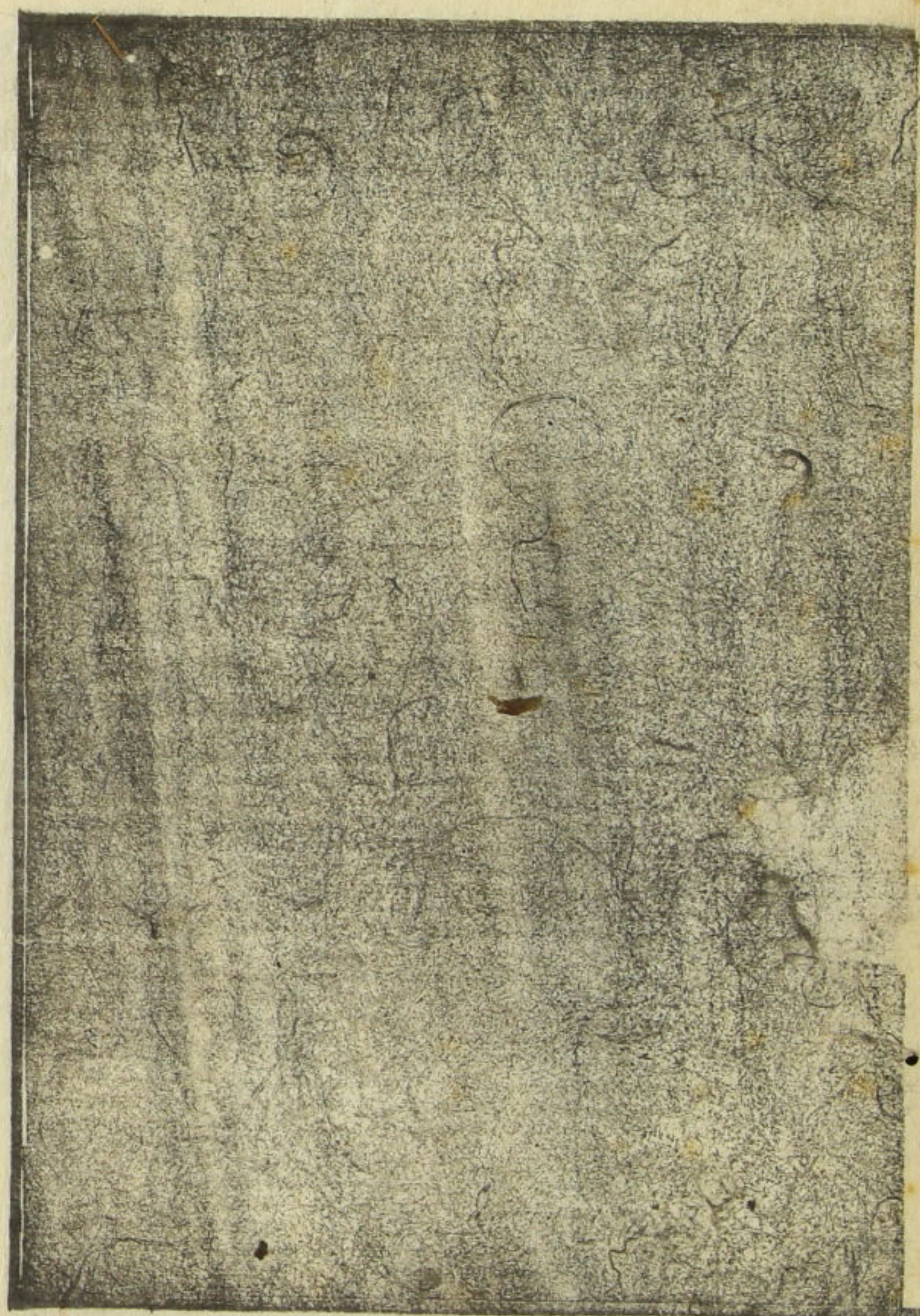
玉藻集 墨女 智月さんと云い流るる女の 全二册 洛 葦村著

栲良發句集 後小ふ集と云い 城南社中著 全二册

丸白実 法集に傳ふる者の存在をあらわす 小本全壹册



五十二
年



Handwritten notes and a small tear at the bottom of the left page.

